

## 都市先住者のエスニシティ ——「バタヴィア先住民」ブタウィの集落と帰属意識——

中村昇平

本論の目的は、ジャカルタ大都市圏の「バタヴィア先住民」ことブタウィ *Betawi* の事例に注目し、複雑多様な都市空間に暮らす先住者が帰属意識の基本単位として想像する都市集落コミュニティ *kampung* の社会編成を分析することで、集団帰属意識の動態を日常次元の対面相互行為状況における個人の認識と表象にまで踏み込んで説明することにある。個人の認識と表象を集落コミュニティの日常生活や社会活動と切り離すことのできないものと捉え、そこにエスニシティへの帰属意識がどのようにあらわれるかを考察する。こうした考察を通して本論が目指すのは、エスニシティの可変性や柔軟性の起点を、戦略的／能動的に行為する主体として想定された個人の内部に見出すのではなく、個人が時に能動的に参与し、時に巻き込まれる中で形成され、変容していく集落コミュニティの生活の中こそ見出すことである。

これまで個人に注目してエスニシティの動態を明らかにしようとする研究の多くは、個別に切り取られた個人の認識や表象の中にエスニシティがどのようにあらわれるかを説明することで、外から押し付けられた集団観念を操作・改変する個人の能動性に固定的な集団観念を打ち崩す可能性を見出そうとしてきた。しかし、個人の認識と表象は、個人がその中で生きる直近の社会的環境と切り離して考えることはできない。本論が主な対象とするのは、ジャカルタ郊外に位置するひとつの集落である。集落の先住者を中心に運営される自発的な社会組織や社会活動が推移する中で、集落コミュニティがどのように形成・維持・変容されているのかを考察する。こうした考察を通して、先住者であるブタウィの人々が集落の活動の中でエスニシティへの帰属意識をどのように認識し、表象しているのかを明らかにする。本論の取り上げるブタウィの事例では、エスニシティの表象が集落への帰属意識と分かち難く結びついており、集落コミュニティへの帰属意識の醸成がエスニシティの意識を支える根拠となっている状況が見いだせる。コミュニティ意識との絡み合いにおいて表出するブタウィというエスニシティへの意識は、個人の認識と表象を単体で取り出して説明することでは理解できない。

本論はこうした事例に注目することで、個々人が集落の社会活動に参加し、巻き込まれる中でコミュニティが形成され、変容する過程の中に個人の認識と表象を位置づけ、そこにエスニシティへの帰属意識がどのようにあらわれるのかを明らかにする。これは、個人の認識と表象を、個人をとりまく環境と社会性（本論の考察では特に集落コミュニティの生活）から切り離すことのできないかたちで展開する過程として把握しようとする視点で

ある。こうした複雑で経路依存的な過程をその現実性において理解するために必要なのは、集団観念を戦略的に操作・改変する能動的な存在としてのみ個人を想定する視点を避け、周囲の環境に巻き込まれながら、時に即興的に、時に熟慮の上に行動する存在として個人を想定する視点である。

第1章では、「ブタウィ」という集団観念の歴史的変遷を整理する。植民地期に様々な移民集団がブタウィ人へと融合した経緯を説明した上で、独立後の変化がそれとは異質なものであったと論じた。独立後は国家の介入の下に地理的認識枠組とエスニシティの区分を密接に結びつける公定の集団観念（スク・バンサ）が住民に広く浸透した。「ブタウィ」の集団観念も、平板な地理的単位に仕立て上げられた「ジャカルタ」を体現する均質な集団概念として国家政策の介入の下に整備された。その過程で、地域・宗教・文化実践の相違から、一律に「ブタウィ」と規定された枠組内部の集団意識の差異が顕在化した。こうした状況では通常、ローカル集団内で政治的影響力をもつ主流派集団が地方行政レベルの政策過程を主導し、自身の文化実践を公式文化として制度化する場合が多い。ところがブタウィのエリート層は、国家の意向を直接反映する首都の地方行政において政策方針を左右するほどの影響力をもたなかったため、自身の文化実践を単独で採用するかたちで公式「ブタウィ文化」の制定を推し進めることができなかった。異なる集団の文化実践や生活様式が並存するかたちで公式文化として採用された結果、国家が文化政策を通してスク・バンサ観念の抽象化と均質化を推し進めたにもかかわらず、「ブタウィ」は明確な内的差異を温存し続け、その内的多様性を容認する集団枠組となった。

第2章では、ブタウィを標榜して動員を行う大衆組織に注目し、数十万単位の大規模な動員が可能となった要因を考察する。2000年代以降に次々と発足したブタウィの大衆組織の動員が成功した背景には、権威主義体制崩壊後の民主化に伴ってエスニシティを標榜する政治的活動が自由化したことや、地方分権化の進展、2000年代後半以降の政治のポピュリズム化の動きといった要因があった。本章はこれらの要因を整理した上で、組織中央と末端支部との関係にも注目して動員の大規模化を説明した。組織の発展初期には、エスニシティという抽象的な帰属意識よりも集落への帰属意識の方が主要な動員原理となっていた。中央と支部の関係に注目して組織構成を考察することで、大規模化した後の動員も集落を基礎とした諸地域の社会関係に依拠していることが明らかとなった。こうした考察を通して、エスニシティという抽象的な動員原理を掲げる大衆組織による動員のあり方においてさえ、集落の意識がその基盤となっていることを確認した。

第3章では、ブタウィの人々の日常生活の中で集団内の差異がどのように認識・表象されるのかを考察した。その結果明らかとなったのは、「ブタウィ」という抽象的カテゴリーへの帰属意識の根底に出自集落への帰属意識があること、つまり、第1章で論じたブタウ

ィの枠組内部の集団意識の差異の根底には出自集落の差異に関する意識があることだった。さらに、集落内部では「旧住民／外来住民」の別がエスニシティの差異と絡み合う帰属意識の層状構造が日常から意識されており、たとえ同じエスニシティ、つまりブタウィの人間であっても、外来者は外来者として見なされ続けることも明らかになった。

第4章では、ジャカルタ郊外のデポック市に位置するカンブン・ウタンと呼ばれる集落の分析から、自生的集落のコミュニティ意識がいかに関形成され、維持されるのかを説明した。「カンブン」は「集落」を意味する語として日常使われるが、本論の事例では行政村落制度に組み込まれていない自生的な集落を指す。ただし、これまでジャカルタの「カンボン」研究の多くは行政区分としての村落 *desa/kelurahan* や近隣地区 RT/RW に注目し、先住者集落を対象としてこなかった。理由は4つある。第一に、1960年代から続く都市開発による先住者の退去、移住によって先住者集落のまとまりが社会的に不可視化されてきたこと。第二に、統治システムに組み込まれておらず、制度的に不可視化されてきた先住者集落は、社会的機能を失ったと思われてきたこと。第三に、移民の混住状況こそが都市的状況の本質と捉え、それを全体論的に把握することを目的とした先行研究は、民族的に同質な先住者集落への着眼点をもちえなかったこと。第四に、先行研究は「成員が毎日顔を合わせて互いの人となりや日常の活動を熟知する」範囲（ジャカルタでは「路地」の生活世界）のみが共同体としての実質を伴うものであるとするコミュニティ観を暗黙の前提としたために、それを越える範囲で営まれる自生的集落の生活世界に着目するという発想が出てきにくかったことである。

しかし、集落が生活者の日常認識枠組に重要な位置を占める以上、問題とすべきは、独立後に行政的地理単位が実質的社会機能を担うようになって旧来の集落がその社会的機能を失う中で、いかにして集落のまとまり（社会組織や帰属意識）が維持・再生産されてきたのかということである。カンブン・ウタンは先行研究が実体的なコミュニティの範囲と想定した規模を越えており、その地理的範囲を裏付ける行政制度も無い。ところが、親族範疇によって外延が規定された集落が、個人の単独性において互いを認識する先住者同士の人間関係に基づいたコミュニティとして想像されている。また、この認識に基づいて先住者が独自に営む組織・活動がある。埋葬互助組織や青年会 *ikatan remaja* の活動を考察することで明らかになったのは、集落の活動が何度頓挫し休止に追い込まれても、先住者が繰り返しその再興を試みてきたこと、そして、それらの自発的活動が常に「集落」を単位としたことだった。国家政策で整備されたブタウィ・エスニシティの概念が住民の意識に広く浸透する一方でブタウィの人々の日常生活では集団内の差異が強く意識されている。第4章の考察からは、先住者コミュニティの自発的な社会組織と活動における実感を伴って認識・表象されている集落の単位がそうした内的差異／多様性の基礎的な認識枠組とな

っていることが明らかになった。

第5章ではコミュニティをとりまく活動の中で個人が周囲の社会性にどのように参与し、巻き込まれているのかを詳細に考察し、日常実践レベルにおける差異／多様性の認識と表象の動態を説明した。具体的には、カンプン・ウタンの武術実践を例にとりて伝統の継承と保護に対する住民の捉え方に注目して、集落意識の維持・変化を考察した。この考察から明らかとなったのは、第一に、伝統的文化実践の教授と理解においては論理と体感を核として個々の動きの裏にある意味や意図を適切に理解することが求められていること、第二に、論理と体感に裏付けられた適切な理解を達成すれば、動きに変化を加えることが自然であり、場合によっては、絶えず変容する周囲の状況に合わせて適切な変更を加えることが伝統の維持にとって必要不可欠であると考えられていること、第三に、改変の歴史的経緯から差異が生じるのは自然なことであり、尊重すべき多様性であると捉えられることである。

これらを念頭に武術実践に関わる日常場面で集落を軸とした差異がいかに関認識・表象されるのかを考察して明らかとなったのは、まず、人々が日常実践の中で差異を「独自性」として——個人に特有な創造性の発露が歴史的に連なる過程として——認識・表象しているということである。武術実践に関わる対面相互行為の過程で人々は周囲の社会状況・物理環境の推移や周囲の個人々の動向に多大な注意を払った上でそこに参加し、巻き込まれているのである。さらに、他流派間の交流の場におけるコミュニケーションのあり方の考察からは、そうした差異を対面相互行為の場面で（少なくとも表層的には）寛容し、尊重するコミュニケーションが日常頻繁に繰り返されていることも分かった。「独自性としての差異」を尊重するやり取りが反復されることでルーティン化し、差異を尊重するコミュニケーションの型が生成・維持されていた。

これまで個人に注目したエスニシティ論は、個別に切り取られた個人の認識や表象の中にあらわれるエスニシティを説明することで、外から押し付けられた集団観念を操作・改変する個人の能動性に固定的な集団観念を打ち崩す可能性を見出そうとした。本論は、集団観念を戦略的に操作・改変する能動的な存在としてのみ個人を想定するのではなく、周囲の環境に巻き込まれながら、時に即興的に、時に熟慮の上に行動する存在として個人を想定し、個人の認識と表象を、個人をとりまく環境と社会性から切り離すことのできないかたちで展開する複雑で経路依存的な過程として把握しようと試みた。

スク・バンサという下位集団単位の文化的多様性を称揚する一方で住民を均質で一元的なカテゴリーに分類し、管理・動員しようとする支配者の影響力を、ブタウィは首都において直接的に受けてきた。その一方で、本論の主要調査対象とした集落の先住者は、日常生活にまで介入して住民を管理・動員する思惑の下で国家が整備し押し付けた行政村落シ

システムによっては把握すらされない自生的集落の意識や社会的まとまりを保持してきた。

本論はこの現代的状況を、周囲の社会性と環境に関与していく個人を焦点として説明した。コミュニティの帰属意識と社会的まとまりを維持するために行われる活動の中核にあるのはあくまで個人の意図と関心、理解だった。集落の生活と社会活動の中では、論理と体感を伴った適切な理解から生まれる差異を個人の創造性の発露として尊重し、それを内的な多様性として称揚するコミュニケーションの型が作法として個々人の意識に定着している。この現状は集落コミュニティの社会实践がたどった経路依存的な過程の暫定的帰結であると同時に、個々の住民生活の固有の歴史性——その都度その都度特定の意図と関心を持つ個人が特定の社会状況と環境の中に関与していき、その社会性の中で創造性を発揮してそこに変更を加えてきた偶発的な出来事の連なり——を体現するものでもある。本論の事例では、支配者に押し付けられた抽象的で一元的な集団観念を住民が内面化しているにもかかわらず、差異／独自性の認識が強く維持され、その差異を尊重する作法が維持されていた。エスニシティへの帰属意識と密接に結びつけられた集落コミュニティの日常生活を考察することで本論は、コミュニティの社会生活を取り巻く偶発的な歴史過程の現時点での帰結として、固定的で分断的な集団観念を押し付けようとする国家政策の理念とは真逆の性格をもった集団帰属意識のあり方が生じていることを示した。